

金銀小判

小川未明

青空文庫

ひとり者の幸作は、家の中に話し相手もなくその日を暮らしていました。北国は十二月にもなると、真つ白に雪が積もります。そのうちに、年の暮れがきまして、そこ、この家々では餅をつきはじめました。

隣は地主でありまして、たくさん餅をつきました。幸作は、そのにぎやかな笑い声を聞きますと、どうかして自分も金持ちになりたいものだと思したのであります。

やがて、わずか日がたつとお正月になりました。けれどひとり者の幸作のところへは、あまりたずねてくる客もなかったのです。結局そのほうが気楽なものですから、

幸作は、こたつに入つて寝ていました。

外には雪がちらちらと降つて、寒い風が吹いて、コトコトと窓の戸や、破れた壁板などを鳴らしていました。元日も、こうして無事に暮れてしまった夜のことです。

「両替、両替、小判の両替。」と、呼んで歩く子供の声が聞こえたのであります。

毎年この夜は、お宝船や、餅玉の木に結びつける小判をこうして売って歩くのであります。

けれど、この晩は雪が降っていましたから、いかにもその中をこうして呼んで歩いて
る子供の声が哀れに聞こえたのであります。

「両替、両替、小判の両替。」という声は、風のまにまに遠くになったり、
近くになったりして聞こえてきたのであります。

こうして、子供は呼んで歩きましたけれど、だれも買ってくれるような人がないとみえ
て、その声はとぎれなくつづいていました。どんなに外は寒かろうか？ こたつにあたつ
て寝ていました。幸作は思いました。そして、子供はもう我慢がしきれなくなつたとみえ
て、今度は、一軒一軒ごとに入つて、

「小判を買ってください。」と、頼んでいるようでありました。

おそらく、家の中には、人々は酒を飲んだり、かるたをとつたり、また、いろいろな
おもしろい話をして笑っているのだと思われました。しかし、だれもこの貧乏な子供に
同情をしてくれるものがないとみえました。その子供は地主の家でも断られたとみえ
ます。

子供は、泣き出しそうな声をしながら、
「両替、両替、小判の両替。」といいながら、こつちに歩いてきました。や

がて、幸作こうさくの家の戸口とぐちで、げたについた雪ゆきをはらう小さな足音あしおとがしました。

「今晚こんばんは、どうか小判こばんを買かつてください。」と、子供こどもは、戸との外そとでいいました。

幸作こうさくはかわいいそうに思おもつて、こたつから出でて戸とのそばにいきました。そして、戸とを細ほそめに開ひらきますと、外そとは身を切きるような寒さむい風かぜが吹ふいて雪ゆきが降ふっています。まだ八つか九つになつたばかりの子供こどもが、真まつ白しろの体からだをして、すすけたうす暗くらいちようちんをさげていました。

「おおかわいそうに。」と思おもつて、幸作こうさくは、小判こばんの一ひとつ包つみを買かつてやりました。

子供こどもは、幾いくたびもお礼れいをいって出でていきました。幸作こうさくは、せんべいで造つくつた小判こばんをねずみに食くわれてはつまらないと思おもつて、それを戸とだなの中なかにしまつて、またこたつに入はいつて、いつしかグーグーと寝入ねいつてしまいました。

幸作こうさくは夢ゆめを見みました。それは、買かつた小判こばんがほんとうの金銀きんぎんの小判こばんで、自分じぶんは大おお金持かねもちになつたという夢ゆめを見たのであります。彼かれは驚おどろきと喜よろこびから目めをさしました。

そして、自分じぶんはいつしかこたつに入はいつて眠ねむつたことに氣きづきますと、すべてが夢ゆめであつたと思おもわれてがっかりとしたのであります。

しかし、どうしてもそれでは、なんとなくあきらめられないような氣持きもちちがして、わが

わぎ起き出で、戸だなを開けて、小判を取り出してみますと、それは取り上げられないほどの重みがありました。幸作は、ますます不思議に思つて、それを両手でつかんで畳の上へ下ろしてみますと、いつのまに変わったのか、まったくほんとうの金銀の小判の包みでありました。

こうなると、幸作は、急に欲心が起りました。あのとき、もう一包みも買つておけばよかつた。そうすれば、自分は村じゆうで第一の金持ちとなつたのだと思ひました。彼は、あの子供がどこへいったらうと思ひました。まだ探したら、いないこともないと思ひまして、彼は、子供を探するために家を飛び出しました。そして子供を見つけたら、みなその小判を買い取らうと考えました。ちやうど、町は二日の売りぞめになつていまして、暗いうちから起きていました。また、みなは買いぞめの朝であつたから、夜中から町へいって、福にありつこうとしていました。いわば元日の夜はこの地方では、みんな寝ないといつてよいくらいで、町の方はもうにぎやかでありました。幸作は雪路を歩いて町へいきました。すると、

「両替、両替、小判の両替。」という呼び声がほうぼうで聞かれました。彼は、もしや、その子供ではないかと走つていきましたが、それは、まったくちがった人が

売つて歩くのでありました。

「これは、おれはふだん 正直者だから、神さまがきつと金をお授けくださったのだ。」と、幸作は思いました。

「神さま、どうかもうすこしお金を授けてください。私は村じゆうでのいちばん金持ちになつて、いままでいばつていたやつらを見下ろしてやりますから。」と、幸作は願いました。

そのうちに夜がほのぼのと明けると、哀れな小判売りの子供は、ある大きな素人屋の軒の下で疲れて眠っていました。雪が体にも頭にも真つ白に吹きつけていました。そして、箱の中の小判は、すこしも売れずにいました。ちようどそこへ通りかかつてこれを見つけた幸作は、大いに喜んで、これはまったく神さまのお授けにちがいないといつて、眠っている子供を揺り起こして、みんな箱の中の小判を買い取りました。子供は眠そうな目をこすつて、びつくりした顔つきで幸作をながめました。彼は、勇んで家に帰りました。そして、戸დანの中なかから、昨夜買った金銀の小判を取り出してみようとしますと、また、いつ変わったものか、やはりせんべいの小判であつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「良友」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「金銀小判《きんぎんこばん》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金銀小判

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>